

# 第 60 回全国高等学校軟式野球選手権大会

## 視察レポート



長野工業高等学校軟式野球班

監督 五味翔太

## 1 はじめに

今大会では本県代表の上田西高校がベスト4と素晴らしい結果を残した。今後さらに長野県のレベル向上を目指していくために、貴重な経験させていただいた内容を報告する。

今回の視察中は神奈川県の方と同行させていただき、試合中にもお話を伺いながら観戦した。全国大会を戦う中での必要なことや指揮官として考えておくこと、ゲーム展開による戦術など多くのことを解説いただいた。この報告書では五味が観戦し感じたことに加え、神奈川の方から教を受けた内容についても記載しまとめていく。

## 2 視察報告

### (1) 8月22日(土)

#### ◎ 開会式 <明石トーカロ>

9時より開会式が行われた。開会30分前にはすでに選手は入場準備を終え、球場裏に控えていた。当日は気温以上に湿度が高く非常に蒸し暑く、五味が汗かきだということもあったが、宿舎から明石トーカロ球場に到着したときには着ていたYシャツはビショビショになってしまった。

神奈川の方から全国大会中、投手がモーションに入ってから手に汗をかき、打球時にボールが滑るという出来事があったと聞いた。当然ロジンは着けていたがそれだけでは足りず、「土を触ってからロジンを着ける」ことで汗によるボールの滑り対策をしたそうだ。ただ審判からは試合の遅延行為にあたり注意を受けたとのことだった。また観戦した試合中にも足がつる選手が何名か見受けられた。前日までは近畿地方も涼しい日が続いていたそうだが、比較的涼しい長野県の選手が「酷暑を戦う準備」も大切と感じた。



今井常務理事も参列し開会式直前の明石トーカロ球場



尋常ではない汗の量

16校の代表選手が入場し、長野県代表の上田西高校も堂々の入場をした。日本高野連奥島会長から挨拶では、軟式野球は日本の文化に定着しており選手は将来の発展の担い手であること、高野連が掲げる3つのFについて、野球を通じての人間形成、勝ち負けは必ずあるがグラウンドで何を学ぶのか、など指導者としても意識しておくことが必要な内容について挨拶された。硬式野球とは異なり、軟式野球は

「生涯スポーツ」でもある。勝負の世界ではあるが生徒の将来像も見据え、また軟式野球という文化のさらなる発展についても考えていく必要があると感じた。



堂々たる行進をする上田西高校



優勝旗返還のレプリカ授与  
(レプリカは盾)

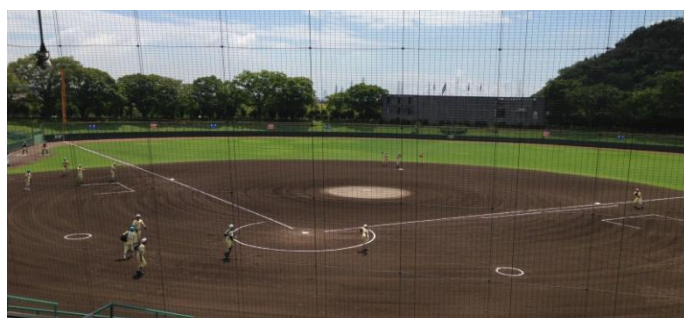
今大会は昨年の 59 回大会が大きな注目を浴びたこともあり、例年以上の報道陣が開会式から駆けつけていた。様々な意見があるとは思われるが、高校軟式野球が世間から注目されていることには素直に嬉しく思った。

◎ 1 回戦 倉敷工業（東中国・岡山）－作新学院（北関東・栃木） <高砂市営>

倉敷工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
作新学院	0	0	1	0	3	0	2	0	×	6

試合後スコアを見直して驚いた。作新の中でも力のある 1 番と 3 番を除き、他の打者全てが「センターから逆方向の打球」を放っており、ここまでのチームとしての「徹底」には正直驚いた。神奈川の先生に聞くと、作新は普段の練習から「引っ張りはいつでもできる。逆方向に打てるようにしていかなければならない。」と意識する指導を徹底しているそうだ。

倉敷工業の各選手のスイングを見ていると、チャンスはあるかと思っていたが、要所ではギアを上げる福田投手の投球に倉敷工が得点できそうな雰囲気は感じられなかった。



作新シートノックの様子  
高砂球場は非常に内野のフェールゾーンが広い

◎ 1回戦 修徳（東京）－浪速（大阪） <高砂市営>

浪速	1	0	0	1	0	0	4	0	0	6
修徳	1	0	0	0	0	0	0	2	0	3

ゲームのレベルは、お世辞にも高いと言える内容ではなかった。1点先制した浪速高校裏の守り、2Bヒットと四球2つ、ワイルドピッチと不安定すぎる立ち上がりの浪速・石野投手。5番打者に対し、2ボールと制球が定まる気配がないこの場面で投手を左の井口に交代。最初の打者こそ死球を与えたが、この継投が功を奏し、井口投手は9回まで13奪三振を奪うなど浪速高校は安定した展開に持ち込んだ。

この場面、石野投手は自ら「もうマウンドを降りたい」というような仕草をしていた。両投手共に苦しい立ち上がりだった。特に浪速ベンチとしては全くの想定外の展開だったと思われるが、選手の状態や心理的な仕草などを見逃さず思い切った継投をしたことが、中盤以降優位に試合を進められてのではないかと感じた。

またこの試合対照的だったのが、両チームのスタンドである。浪速高校は地元でもあるため一般生徒も含め多くの応援団、それに対し修徳高校はほぼ保護者のみであった。中盤以降応援団の数的にも球場の雰囲気は浪速が圧倒していた。



スタンドを埋める浪速応援団



修徳高校スタンド

(2) 8月23日(日)

◎ 1回戦 鹿児島実(南九州・鹿児島)－上田西(北信越・長野) <明石トーカロ>

鹿児島実	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
上田西	0	0	0	0	0	0	0	2	×	2

多くの報道もあったが、上田西・高野投手の毎回14奪三振ショーだった。2回にまずい守りと四球で唯一のピンチがあったが、圧巻の投球でしのいだ。

この試合鹿児島実が2013年夏の甲子園で禁止されたカット打法ともバントともとれる打撃を繰り返し行っていた。「緩い内野ゴロを打つための打法」であるとも考えられるが、審判団の見解を聞いてみたいと思うほどの内容だった。

スタンドで見えていて、今大会初のタイブレークになるのではとも感じる展開であったが、8回相手のミスによって得たチャンスをものにし、長野県に11年ぶりの全国勝利をもたらしてくれた。



球場入りする上田西ナイン  
(撮影するテレビカメラは鹿実関係?)



応援団として到着した上田西硬式野球部員



ユニフォームに着替えノックを打つ  
上田西・清水部長



スタンドに勝利を報告する  
上田西サイン

歓喜にわく上田西大応援団



前述の修徳－浪速戦でも述べたが、この応援団の影響は大きく感じた。昨年 59 回大会で上田西が対戦した崇徳高校（広島）の部長先生とこの視察中にお話する機会があったが、「上田西の大応援団は素晴らしく、球場の雰囲気を読み込まれた中での戦いだった」と振り返ってくれた。この試合でも同様にスタンドで観ていても上田西の選手たちが最高の環境でのびのびと野球を楽しんでおり、回を追う毎に選手たちが成長していくことを感じた。

「全国大会」という場であることを差し引いても、選手たちにより良い環境でプレーさせてあげられることが生徒の成長に直結することであると実感した。

◎ 1回戦 中京（東海・岐阜）－新田（四国・愛媛）＜明石トーカロ＞

中 京	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新 田	0	0	0	0	0	2	0	1	×	3

組み合わせが決まった段階で観戦したいと思った前年覇者・中京と四国の強豪・新田のカード。結果は新田・井上投手のノーヒットノーランとなったが、随所に学ぶ点があった。



新田－中京 両校ナインが整列

まずバントについてである。両チームともにコースだけではなく、バウンドの高いバントをすることで走者は2つ先の塁を狙う攻撃が何度か見受けられた。サインプレイのひとつとも考えられるが、バントひとつとっても細かな部分まで徹底されていた印象である。

守備が徹底されていた反面四死球について、新田・井上投手が6、中京・加納投手が7と両投手共に苦しい投球が続いた。特に中京6回の守りでは1死1、2塁から中京得意のケン制で2塁走者を刺した後に再び四球を与え、その後タイムリーを打たれるという展開であった。試合全体のリズムを考えると非常に大きな四球になってしまった。またタイムリーを放った4番・井上の場面では2ストライクからベンチが攻撃のタイムを取った。ベンチからどのような指示があったかはわからないが、ゲームの展開において「間」が生まれていた。これもベンチからの「仕掛け」と考えるならば、非常に大きな「タイム」だったと感じた。

8回裏の新田の攻撃では、先頭打者が四球により出塁。その後結果として2度の送りバントで2死3塁とした。次の1点は決定的になる場面で、相手に絶対にミスを許せない状況を作り、心理的にも攻めたベンチの采配はさすがと話していた最中に3番打者が初球にタイムリーを放った。試合展開による「攻め方」であったり、相手の心理を突いた戦い方ができることは一発勝負では重要と感じた。

追い詰められた中京9回表の攻撃。スタンドからは中京チャンステーマが流れ出した。延長50回が行われた59回大会でお馴染みになっていた感もあり、球場の雰囲気が変わっていた。結果としては結局ノーヒットで試合終了を迎えたが、これまでノーエラーだった新田野手陣に乱れが生じたり、正面になったが、中京打者が確実に捉えだしていた。球場の雰囲気がつくられることの怖さを感じた。逆にもう少し早い回からこのチャンステーマが流れていたなら、展開が変わっていたのかもと思えるような雰囲気はあった。

スタンドから観ていて、中京の打者は「引っかけた打球」が多かった。新田・井上投手がずば抜けて良いという印象はなかったものの、内外の使い分けと緩急を使った投球、勝負にいく際の気迫は素晴らしかった。

中京・加納投手は被安打2であるが共に得点に絡んでしまった。共に「四球」からという点は与えられたワンチャンスをもものに出来るか否かという勝負強さも全国で勝ち抜くには必要なことと感じた。

非常にハイレベルな一戦であったが、「要所」をどのように抑えどのように攻めるかという点と、「采配力」でも学ぶことが多いゲームだった。



### 3 まとめ

#### (1) 4試合の観戦を通じて

全国大会での観戦において、各試合で共通して感じたこと、特に重要に感じたことをここにまとめる。なお投手力、守備力等については今回は割愛させていただく。

#### ◎ 序盤の戦い

観戦した4試合すべてが序盤に動きが起こったもしくは動きそうな気配があった。投手の立ち上がりだけでなく、野手も含めたチームとしての立ち上がりをどのように入っていくかという重要性は改めて感じた。

#### ◎ チームとしての徹底力

逆方向への打撃や叩きといったチームとしての戦いに徹底力があるかという点も重要と感じた。私見であるが上田西の躍進にも同じ事が言えると思う。昨年のチームと今年のチームと比較すると、昨年のチームの方が個々の強さ含め「力」はあった。ただし今年チームの方がチームとしての戦いが「徹底」されていた印象が強い。

計8チームを観たが、各チームの特色ある「徹底の仕方」が垣間見えて非常に興味深かった。チームの実情など様々な要素があるが、どのような「徹底」を図っていくかがチームづくりで重要であると感じた。

#### ◎ タイムの取り方、使い方

神奈川の先生方が観戦中さかんに仰っていたことだ。予想外のミスが起きた場面。ランナーを出した後、ボールが2球続いた場面。「様子がおかしい」ときはすぐにタイムを取るべきだと言われていた。特にトーナメントの初戦であるからこそ慎重になるのではなく、序盤から早めにタイムを使うことも大切になってくる。ただご存じの通りベンチから使えるタイムの回数は限られている。そのために捕手や内野手が異変をいち早く察知し、グラウンド内で「タイム」を取れる選手を育てることも重要になってくるだろう。

#### ◎ 暑さの中での戦い

開会式での私の多汗はさておき明石、高砂共に暑さは相当なものである。実際試合中に足がつる選手が複数名見受けられた。厳しい環境下でましてや極度の緊張感もある中での試合に対しての準備が必要になると考えられる。

## (2) 今後の取り組みについて

今後長野県の各チームに求められることは、常時ベスト8 (=国体出場) 以上に進出するチームづくりだろう。そのためには各チームが切磋琢磨し、「長野県」としての強化が必要だ。今回は神奈川県の方と同行させていただき、多くのお話を伺うことが出来た。神奈川県では各チームの強化を図ることはもちろんだが、3月に交流戦を開催し全国から多くのチームを集めること、参加チーム数の拡大や女子選手の活躍の場をつくることなど県全体で「軟式野球」の発展、繁栄を考えており、また将来的な目標としても全国大会の出場枠を神奈川県で「1枠」となるようにと、皆で協力し日々取り組まれているようだ。

長野県でも全てを取り入れては難しいとは思いますが、例えば全国からチームを集め長野県で強化交流リーグを行うこともひとつと考えられる。特に夏休み期間中は県外の学校が長野県内で合宿を行っているという。全国大会に出場できない新チームはこれから「チームをつくっていく」時期であり、強化を図っていくために都市部より過ごしやすい長野県内へ、また地理的にも関東、東海から比較的近い位置にあることも合宿地として選ばれていると思われる。

夏休みの期間を使い、県内チームと県外チームとの交流も含め、試合を行っていくことも長野県としての強化策のひとつではないかと考えている。新チームを結成した段階でまだまだチームとして仕上がっていないことはもちろんだが、この時期に全国レベルのチームとの対戦は選手にとってはもちろん、われわれ指導者にとっても刺激を受けられ、これから1年間の「チームづくり」に大きな影響を与えられると思う。実施に向け会場、宿泊地、審判員等の確保や予算面での問題等多くが考えられるが、個人的には県全体の強化のために多くの先生方と意見交換や協力をしながら実施に向けていければと思っている。

## 4 最後に

末筆になりますが、今回全国高等学校軟式野球選手権大会へ派遣させていただき、関係各位に感謝申し上げます。今回貴重な経験と有意義な時間を過ごすことができました。この視察により学んだことを自チームはもちろんのこと、今後の長野県高校軟式野球界の発展、強化に生かせるように努めていきます。

長野工業高等学校 軟式野球班  
監督 五味翔太